



季
能古博物館だより

野見山暁治「パリ風景」1963(昭和38)年 水彩・紙・30.0×45.0cm (谷口コレクション)

郷土現代画家の作品について

谷口治達

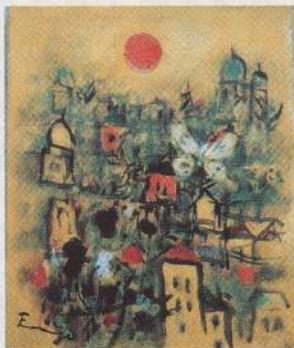
平成元年七月に誕生した能古博物館、その本館横に別棟として郷土現代美術館が新しく建てられ、この春オープン運びとなったのは喜ばしい。この絵画館にまず私の寄贈した絵画等約六十余点が陳列され、四月中旬に公開予定という。一層の喜びである。

開館に先立ち、初代館長に就任していた旧知の彫刻家竹中正基氏から館の性格や方針を聞いて素晴らしいことだと思った。私に館の専門委員

になるよう要請され、その場でお引き受けしたのだった。

私は福岡市の西区に住んでいる。西区は自然環境に恵まれているが文化施設は乏しい。何かよい施設がほしいと常々思っていた。能古島も西区の一角であり、そこにユニークな博物館が出現したわけである。

開館後のある日、博物館を訪ね



山田栄二「街」油彩・カンヴァス・27.5×22.0cm

ならぬ熱情に接し深く感動したものである。財団法人亀陽文庫の博物館なので亀井南冥・昭陽を顕彰する資料の展示が主となるのは当然

だろうが、もっと幅を広げて能古島との関わりも追求するとのことであった。その一端として同島出身の近代洋画家多々羅義雄の遺作寄贈を受け、これを常設展示されているのは有意義であった。忘却されかけていた質実の画業に光が当てられた。

さらにその折、竹中氏が「地元九州の現代美術も何らかの形で展示し

うと姪浜渡船場から乗船してみると、夏の緑に包まれた能古島は海中の宝玉のように輝いていた。その南斜面に建った白い博物館は島にさらにはめ込んだ小さな宝石さながらである。その時、庄野寿人理事長に初めてお会いし、博物館運営への並々

能古博物館だより

たい」と話された。それで私に一つの願望が頭をもたげ、思いきって口に出してみたのである。それは私が自宅に持っている数十点の絵画をこの博物館に寄贈できないか、館の一隅で時折展示してもらえないかということであつた。実を言うとかねてから寄贈先を探していたのである。

竹中館長は庄野理事長と相談され、

結局快く受け取って下さる

ことになった。

それは次のような経緯の作品群である。

私は昭和六十三年、現職

(九州造形短大教授)に転

ずるまで三十二年間、西日

本新聞社に勤務し大半を文化畑で過

した。昭和三十八年頃から長く美術

を担当したため、美術以外の仕事も

いろいろやつたし管理職にもなった

が、外部からは一貫して同社の専門

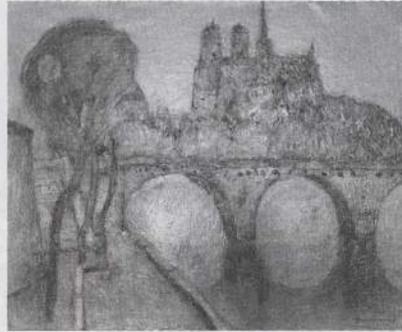
的な美術記者と目されてきた。

昭和四十年代から五十年代にかけてたくさん画家たちと出会い、交

際し、記事に書き、展覧会を企画し、

個展開催に協力し、その案内状に推薦文を書き、発刊画集に解説文を寄せたりしてきた。

そんな過程で画家たちから作品を贈られることがあり、十年二十年たつうち数十点に及んだ。自ら購入したものもいくらかあるが、記者のサラリーではなかなか絵を買う余裕はない。



古賀耕児「セーヌよりノートルダムを望む」1981(昭和56)年・油彩・カンヴァス・53.0×65.0cm

寄贈時に数えてみると五十余人六十余点あり、ほとんどの福岡を中心にして九州在住・出身画家の作品である。油彩、版画に彫刻も一点ある。もとより私が親しくつき合った多数の画家たちからするとほんの

一部である。

つき合った画家がみんな作品を呉れる理由はないし、自作を人に贈るのを嫌がったり、恥ずかしがったりする画家もいる。私の方も記者として絵をもらうのは本来不当であり、

固辞するのが普通である。しかし「記念に」とか「友情のしるしに」など

と申し出られると拒めぬこともあ

る。敬愛する画家の場合、うれしくもある。そういう絵が長い間に増えたのである。

狭い自宅の中にかんりのスペースを占めてくるにつれて将来どうしたらよいか問題になってきた。もらったものを売るわけにはいかぬ。焼いたり捨てたりもできない。人にあげるのも具合が悪い。できればまとめて適切な場所に残したいという願

いが高まったのである。

その中には九州画壇の指導的画家がたくさんいる。中央で名をなした人もいる。多くは無名とも言える地方画家だが、私にとってはそれぞれ

思い出深い人たちだ。

私が関わった昭和四、五十年代は福岡一帯の美術界が特に熱気を帯び

盛り上がった時期だった。集まった作品は小品が多く、一人一人の代表

作とか名作とは言えないとしても、そんな熱い時代の一面を反映する緊張感のある作品と想っている。

本格的な油彩もあれば軽妙な水彩もあり、奇抜な発想の実験作もある。

抽象も具象もあるが、全体的には九州の風土的特性を見出すことができ

ると思う。少なくとも私にとっては

いづれ劣らぬ珠玉作である。

地方の画家の作品を軽視する人が

いる。そんな人には取るに足らぬ作品群だろう。しかし東京画壇で幅を利かす画家だけが日本美術を代表し、地方の画家は無用無意味の存在だろうか。

私はそんなことはないと思う。美術は本来見て確かめられる範囲が基本である。身近で描いたり教えたりしている美術家の活動を通してこそ、人々の美術への理解や愛好心は深められ、大きく言えば印象派の名作ともその彼方にあるのだ。

そして現実には、地方にいて無名ながら、いや無名ゆえにこそ敬虔に真摯に味わい深い作品を描いている画家は多々いるのである。いったい絵画とは何か、それを金銭的評価の対象

だけで考える人は私とは無縁である。

地方にも美術の流れがあり美術史がある。だが放っておくとすぐ忘れ

去られてしまう。県や市の美術館も地元の主要作を収集しているが十分

とは言えない。それらが美術館の壁面に飾られる機会も多くないのが実情だ。

以上のような経緯の作品群である。

昭和四、五十年代に九州で活動した一美術記者の出会いと交友の記念物であつて、富豪や企業のコレクションとは性格が異なる。私も記者とし

て同じ時代同じ地域の画家たちを声援し励ましてきたつもりだし、また彼らから教えられ支えられて現在に至っている。

卒直に言って「もらった」というより「預かっていた」という気持ちが強くと、よい落ち着き先を探していた。そんな折、能古博物館にめぐり会い、新しい美術館まで建てて展示してもらえたことになったのは幸運

福岡藩書道師

二川相近 (ふたがわすけちか) について

古川 善久

野村望東尼を知らぬ人は少ないであろうが、二川相近を知る人の数はさらに少ないであろう。野村家から二川家に入った人もあるのに。

相近は明和四年(一七六七)十一月二十四日、父相直、母同族重紀の女の息として榎木屋町に生れる。天保七年九月二十七日、その榎木屋町の家にて病没、享年七十、箕子町(大手門)二丁目 円応寺に墓がある。

少年の頃、わたしは頼山陽詠「花よりあくる三吉野の春の曙見わたせばもろこし人もこま人も大倭心になりぬべし」として覚えたのが、「花

で、肩の荷が下りた思いである。

郷土現代美術館がオープンしたら能古の美しい四季の景の中で一人でも多くの方々に、かつて活躍し、あるいは今も活躍している郷土画家たちのさまざまな作品を味わってもらいたいと念願している。

もっとも庄野理事長は五十余人の画家の中に物故者が増え、現代絵画の名から遠去かりつつあるとして、

よりあくる三吉野の春の曙見せたらばからくに人もこま人も大倭心になりぬべし」と二川相近作「今様」が真であることを知ったのは後年のことである。

すでに大正六年、佐々木信綱博士が『東亜文庫』(第十二巻第八号)で「注意すべきは、かの一般に頼山陽の作と伝えられている今様が、一、二の字句を異にして『花よりあくるみよし野の 春の曙みせたらば かな 国人もこま人も 倭心になりぬべし』となつて収められている事である」として、相近の今様集「しぎの

この作品群を基点に今後は同館が郷土現代絵画の収集を始め、展示に活力を加えて行きたいと話しておられる。専門委員として私も収集の任を負う一人となるかもしれないが、たとえ小粒な博物館でも郷土美術の新しい流れに温い眼差しを向けられることは素晴らしいことである。●本稿中の洋画三点は、谷口コレクションによるものです。

はねがき』のことを紹介済みである。にも拘らず大正末期生まれのわたしが頼山陽作とされる方を覚えたのは、それなりの理由があることであろう。そのそれなりの理由を尋ねれば、近代日本の富国強兵策につらぬかれた栄光も、病弊も、苦患も、明治維新以来の教育、社会民俗も解き明すことが出来るかも知れない。しかし、ここでは措くこととする。

佐々木博士はさきの文に続けて「相近翁は明和四年に生まれて、天保七年七十歳を以て歿した。明和四年といえは賀茂真淵の歿した二年前、天保七年といえは、本居大平の歿した三年後である。まさに徳川文学史の中期から後期にまたがる一歌人である。而して言通(筆者註大隈言通、望東尼(筆者註野村望東尼)の一系

谷口治達コレクション

【収蔵作家】

—敬称略・五十音順—

油 彩

青沼 茂男・足達 襄
阿部 一貴・池松 末人
石橋 泰幸・井上 寛信
井上 哲助・引頭 勘治
宇治山哲平・大内田茂士
オチオサム・熊代 駿

水彩・素描

赤星 孝・伊藤 研之
奥村日出雄・加治重委子
木下 新・小柳 竜児
野見山暁治・浜田 隆志
樋口 哲平・古川 吉重
山田 栄二
許山 孝一・山下 純司

日本画

太田 歳・小林恒火子
秋山 巖・大津 英敏
大場 正男・菊畑茂久馬
小南喜三郎・坂本 善三
坂本繁二郎・多賀谷伊徳
竹岡 羊子・田崎 広助
寺田健一郎・中林 忠良
棟方 志功・安恒 春一

彫 刻

大村 清隆

統が近世和歌史に於ける一大偉観たることが否定し得ない以上、言道の師たる相近の名は、また将来の史家の忘るべからざるものであろう。相近は決して福岡という一郷土の偉才でない。」と説いている。

明治四十三年十一月一日発行、雑誌『心の花』に上田萬年博士が一文を寄せられている。その中から一部抜粋する。

〔前略〕同市郊外の向が陵にかの勤王の女丈夫と

して、又徳川末期の女歌人として尊敬すべき野村望東尼の別墅の跡を訪うた。

昔ながらに遺つ

てゐる一木一石、いづれも亡き人の昔を語るやうで、その面影を偲びつつ旅寓に帰り来た所、翌日うれしくも二川近氏の訪問をうけた。(中略)近氏は相近翁の遺稿『鳴の羽がき』一卷を携へ来て言はるるには、

祖父は今様を好んで詠じ、斯く一卷を遺した。然るに故落合直之君の編纂に係る『新選歌典』(筆者註 明治二三年、小中村(池辺)義家、萩野由之とともに『日本文学全書』を刊行、翌二

四年には『新選歌典』を編纂し作歌指導



「くさくさにつつまわけたるたなつもの
さかへは神のめくみとをしれ 相近」

(35・8×5・7cm)

これも又句形の変化と見て面白い。故にここに抄録して隠れたる今様歌人を世に紹介いたす。」

いま『新選歌典』『心の花』『東亜の光』などを讀んだ人がどの位生き残っているであろうか。また、当時の人々の教養、生活程度ではこれらの文章を讀むことの出来たのは国民のごく僅かであったのではなからうか。わたしの両親などもその部類に入るであろう。

昭和十一年十一月、その百回忌に

あたり、玄孫二川瀧三郎氏により『二川相近風韻』が出版された。これには当時、伊東尾四郎、武谷水城など筑紫史談の方々が協力して、三〇八頁の伝記が刊された。

瀧三郎氏は「唯私の最も関心事は子孫として祖業を記述する上に於て、時に、或は知らず知らず誇張の言辞を弄して識者の鑿鑿を催さしめ、爰に其徳を讀すものにあらざるか」と述べられているが、当時でさえ伏散しがちな遺著、遺品を協力者の方々之力添えもあつたであろうが、ほぼ揃え充分な相近の伝記と言えよう。

その後、寡聞にして相近に関する研究、評伝等についてはあまり聞かぬ。『うわさ』紙上(昭三三・三四・三五卷)に筑紫女学園短期大学教授上野正澄(故人)が『郷土の文学』として「二川相近について」「二川相近の歌について」「二川相近の漢詩と書道」なる文がある。郷土芸能、郷土玩具という言葉に対応して郷土文学という概念を考えられたらしい

が「郷土文学とは、その郷土の匂いを持つてゐる文学ということになる。それを上昇させて、各地各様の文学形態なり、文学内容なりを比較研究することによって、日本民族の持つてゐる文化の形態というところまで

持つて行くべき学問の一形態だと考へている。」と言われるのは学問研究の一つの見識とは思ふが、二川相近の人間像を把握するのは簡単ではない。学生達にも相近研究を進められたらしいが、県立図書館で見出されたのは、「郷土の学者二川相近先生」一篇のみである。

わたしが何かにつけてお世話になつた筑紫豊氏(故人)もその発表文の末尾には括弧の中に郷土史家とあつた。わたしは筑紫氏を単なる郷土史家とは思つていなかったし、諸事万般に通じ、かつ一つの物事にも幾種類もの見方、考え方を教わつた。

その筑紫氏が福岡市観光課の出した『はかた一福岡市の史話と観光』の中の『人物記』の中に簡潔に紹介されているので、今迄述べてきた部分となるべく重複しないように引用する。「松蔭又は篁里と号し通称を幸之進といつた。」「黒田藩の御料理人頭格であつた樹木屋町の二川相直の子に生れた、幼にして亀井南冥に師事し甘棠館に学び、初め政治経済の学を志したが、感ずるところあつて、専心書道の研鑽に励み、大師流その他の書を学び、二川様を創始し、執筆法を著した。

国学を田尻梅翁に学び、『松陰草

盧録』その他の著があり、又楽律にくわしく『古学音符』の著があり、今様歌に巧みで『鴨のはねがき』遺稿があり(中略)廿八歳の時、家職の御料理人より書字師になったが、相近生来多病、中年の頃より門を閉じて外出せず、自適して天保七年歿した。」

余りにも簡明にして要を得ているので、二、三付け加えて、相近像を補ってみたい。わたしは敗戦後間もなくの頃から、先師の教えもあり、相近に興味を持ち、その実家を訪ねたり、墓に詣でたりしたが、昨年その評伝を書きたいと現在二百字詰三百枚ほど全体の約五分の二ほどまで書いている。

その墓碑銘を亀井南冥が撰文した相近の父相直は、本家二川傳蔵重紀の女を妻とし、相変わらず御料理人家業に従事していたが、性質実直で職務に勤勉し、藩公に寵遇され屢々褒詞を賜わり、微禄の割には極めて重用され、遂に御料理人頭まで昇るが、江戸在勤中四十九歳を以て病歿する。同人は南冥と親交の間柄で、学問を好み、又一身の利害を省みず、誠忠以てその所信に向って猛進する風があった。

二川相直、幼君於江戸御学問奨

励の事に付上書(天明二年の冬於東武存寄之儀申上候次第之事)」

「二川相直、藩邸御壹所向等風習改革に付上書」等を見ればその風格がよく覗かれる。

貝原益軒以来、その高弟竹田春庵の子孫(朱子学)が藩士教育の主流であった福岡藩が、新しく徂徠学派の民間儒者亀井南冥をいれて、藩校を東学問所(修猷館)、西学問所(甘棠館)と併立させたのは、全国



二川玉篠「夜梅図」
二川相近題書
105.5×23.5cm

ならず、是等の点は南冥と相通ずるものがあつたのであろう。甘棠館の開館が相直客死の翌年となつたのは相直のために残念である。

又、相直の妻、即ち相近の母なる人も相当の女であつたことが、相近幼少の頃、貧困の中、家財を売却して、我が子の勉学を助けたことなど、相近の自叙伝『雪の日々記』などに切々と語られている。

父が幼にして、南冥につけて学問

的に珍らしいことである。この甘棠館設立に当って、微臣の相直の力など微々たるものであつたにしろ、力があつたと言われる。また、相直は南冥に長ずること八歳。素より学力

に至っては比較すべきものではないが、その気概、識見等に於ては、相当見るべきものもあり、先に挙げた上書の如き、当時、事勿れ主義横溢の時世に於て、微禄の身をも省みず、直言を敢てしたのは南冥の『半夜話』等の口吻に類するものなきにしもあ

をさせ、母がその子の学問の成長を助けてくれたこと、その他について語る相近の父母に対する切々思慕の情は、その歌などにも読みとれる。

梶原景翼著『二川相近伝』の書き

出しは「二川相近字幸之進俗称字ヲ以テ行フ。姓ハ源、松蔭ト號ス。又嬰風ト称ス(櫻楓ヲ愛スルヲ以テナリ)」とある。瀧三郎氏によれば「相近廿歳頃迄は相親と称へ、雅號の松蔭も始めは多く松陰を用い、篁里の別號も晩年には殆んど使用せず、

従つて其の雅印も現存しません。(中略)外に雄嵐山樵、又は小嵐山樵とも称しています。之は高雄の楓、嵐山の桜を庭内に植えた後の事で、又玉篠なる号は、始め相近のものでありましたが、後に二女瀧(雅印の一部と共に譲つたものと思います)」とあり、外にも雅印を見ると異つた雅号も用いたようである。船主の機なにぶんにも、相近は実に多能で書家であり、国学者であり、漢学者であり、武術はもとより、音楽、絵画、工芸、蹴鞠にまでわたる才芸を持つていて、これらの総合的研究は至難ことで、それぞれは専門的に研究しなければならぬことは論をまたない。

福博の人にのみならず、著名で国中の人に愛好されている仙厓和尚との和歌、詩文の交歓、そして仙厓が、相近の寓居を舟で訪れた時には、能古島を望んだかも知れぬなど想像することは嬉しいことである。

昭和五十一年『二川相近書跡目録』が福岡市歴史資料館で作成され、現在県立図書館に収蔵されている。

●次号は相近の長女「福岡藩幕末歌人二川鶴子」(前田淑 福岡女学院短期大学教授)を掲載します。

原題「真翁聞きがき」

真翁銅像ものがたり (五)

・シベリア奥地視察
・運と辛抱
・大不漁

明治四十(一九〇七)年十一月、総領事川上さんの温情に甘え、ハルビン総領事館在職のままウラジオストクに移った。ウラジオは日露戦役を挟んで前後二回の勤務地であり、街の隅々までよくわかっている。

早速、ウラジオ総領事の野村元信氏を訪ねて挨拶すると、野村さんは開口一番、「君のことは先輩の川上さんから丁重な依頼を受けている……」。以後君は当領事館に向向勤務し、来年実施の日露漁業協約について関連する諸状況の調査をして貰う。その方法はすべて君の判断にまかされているが、必要なことは当領事館も協力するからなんでも遠慮なく相談してくれ給え。」と。

次いで、新協約実施のため、細目にわたる補則規定案もほぼまとまっているが、なお両国の主張に若干のズレがあり、明年四月を期した漁区入札のため、目下双方の実務者レベルで詰められている、と。その内容も聞かせていただいた。

さらに、野村総領事は、「川上さ

んの要望もあるので、すでに漁期は過ぎていくが、シベリア大陸を北上して、できればタタール海から間宮海峡にそう沿海州一帯の漁場を視察してはどうか。漁場で越冬する日本人漁業者の話も聞けると思う。」と勧められた。これこそぼくの渴望するところである。

川上さんといひ、野村さんといひ、ぼくは立派な上司に恵まれたと強く胸を打たれるものがある。微力なぼくをして

て少しでも国家有用を考えられていると痛感した。北洋漁業を志しながら、実地を踏む機会を得なかった不安と後悔を吹き飛ばすことが出来る。残念ながらカムチャッカ半島まで往く時間はないが、せめて北緯五〇度を越える沿海州地域を見学すれば、およその情況は把握できると考えられるのである。

早速、旅程区間のロシア政府現地



若き日の真藤慎太郎
明治44年函館にて

諸機関に提出できる証明書類の発給を得たが、民間の旅行者でない領事館員という身分はすべてに好都合であり、これにも川上さんの深い配慮をありがたく思った。
寒冷厳しく大地は凍てつき、交通は雪橇による以外にない。馬橇で行けるところまで行き、先は犬によること、とされた。
大型橇に防寒旅具と非常食、見るからに馬力が見える挽馬に、冬のニコライエフスク経験者である中国人馭者が附いた公用出張である。

これで旅中越冬し、二月末まで四カ月、北緯五二度の沿海州に入り結水のツムコン河に達する

往復旅程を踏破し得たが、野村総領事の話の通り、漁業協約発効前であるため、表向きロシア人名儀で日本人の漁業者多数の越冬実態に接してなまの体験談を得ることができた。
これらの漁業者は新協約による漁区入札で租借契約を得ればロシア人名儀の代償金が不要になり、なお公然と漁区内施設を設営でき、期間滞在も可能になるのである。彼等の越

冬施設は、廃屋古材を使用し、ようやく組み立てた程度の小屋で睡眠は獣皮袋に入る生活である。越冬の目的は漁網具の保管もあるが、漁獲鮭鱒類の塩蔵品出荷を最大の目的にすることもある。漁期中の取引出荷は、量が多いこともあって価格も安い。冬期になると、日本、北支、中支奥地の農村、又は一般労働者向けの冬場食品としてまずまずの価格で特定の商人に取引できる。そのために長期の塩蔵保存が必要になるが、その方法は雪積地を大きく深く掘り、これに塩を使つた鮭鱒を投げ入れ、さらに塩と雪を被せる。つまり地中に「雪・鮭・塩・雪」を幾層も積み、地表に雪を厚く、さながら天然冷蔵庫として冬場の需要と価格の有利を待機するのである。
ぼく自身、満州義軍で中国奥地農村に於て、冬期食として塩鮭と鱒を体験しており、なるほどと思った。
しかし、この商法に感心できないのは、漁獲後、鮮度が高い内に塩加工されていないこと。加えて、その後の冷温保存も幼稚過ぎることである。旅行中、何度も天然冷蔵庫からの取り出し作業に再会したが、遠く離れた地点からも風向きによっては甚だしい悪臭で、その状況に気付く。近くで手に取って見る塩鮭鱒は、い

わゆる油やけ、変色を呈しており、折角の地中深い天然冷蔵庫も、たとえ塩と雪水によっても大量貯蔵による発酵熱を生じ、徐々に腐敗が進行していることになる。むしろ外の冷気に個体のままで晒すことが良好と考えられるが、この方法で大量を取扱うにはさらに工夫がいるのは当然である。

要は、塩蔵・冷温保存できる科学的方法の開発を急務とする。漁場に於ての缶詰化も重要であるが、缶詰が農村や一般大衆への安価供給になるかを課題にする必要がある。

予定通り二月末にウラジオ帰着。沿海州旅行出発前、ぼくの北洋漁業志向は、まず良き漁業者の使用人になることからスタートする。このための就職についても野村総領事をお願いしていた。

日露漁業協約による露領漁区公開とその租借入札はウラジオ実施が発表されており、ために四十一年二月には統々と多数日本人のウラジオ往来が多くなっていた。また、この人達は必ず総領事館に出頭し旅券提示するのは当然で、その後は漁区確認情報入手と調査、さらに入札に関する指導を求めることになる。

三月に入って数日後、ぼくの要望

に対して、野村総領事から函館の瀬谷和一氏を紹介された。但し瀬谷氏についての、漁業実績など予備調査も不行き届きであるが、露語通訳と漁区入札、落札後の契約事務、さらに租借漁区現場も担当を依頼したいという、熱心な要望があった。

ぼくは、お互いに未知の出会いであり、すべて合縁機縁とするほかになく、瀬谷氏に従うことにした。

瀬谷氏からも、入札事務、漁区状況の確認、租借契約漁区の現地業務の総括を委任された。報酬については漁区落札以後から月給百拾円、漁期終了後は儲け分配を考慮すると約束された。

三月末入札応募者の受付め切りによって、参加者は六〇名と総領事館で確認され、一事業者で五漁区以上の租借希望もあるという。

ぼくは、以前から考えていたカムチャッカ半島西岸、オホーツク海のウトカ河とオペラ河間で二漁区連結入札を瀬谷氏に進言したが、瀬谷氏は地域については同感、ただし入札は一漁区でよいと明言、ぼくはこれに応ずるほかはなかった。

入札結果は、四月五日発表。予定通りオペラ河を北上八露里（一露里

は一、〇六七m）、オペラ一九四号漁区を得ることができた。

なお、この入札で日本人租借決定漁区は総員五四名、漁区数で一一九の租借契約済が発表された。この中で二漁区以上の契約者三一名、うち最多漁区租借者は七漁区が三名。一人一漁区は二三名で、旺盛な漁業者を見ることができた。

以上の結果を見て、瀬谷氏は急ぎ帰国を希望し、ぼくも同感であり兩人同時に出発。川上さんにはウラジオ総領事館専用電話で委細を話し、ぼくの退職をお願いした。

舞鶴上陸後、瀬谷氏は函館に直行。ぼくは一応東京に寄り、先輩など世話になった方々に挨拶した。

その際、頭山先生を訪ねると、うんとしんぼうセニャアと言われ、記念に揮毫を貰ったが、その言葉通り「運と辛抱」の字であった。額装を東京で頼み、函館に送付された。朝起きて仰ぎ、夜は寝る前に見る習慣になったが、うんとしんぼうせよが運と辛抱にかけられ、やがて「運と辛抱」は一つであると解するようになった。

頭山先生邸では杉山茂丸さんに会うことができ、ぼくの北洋漁業志向を丸い目を大きくして聞いていた

いた印象をいまでも忘れない。

さて、函館で瀬谷氏を訪ねて驚いたことは、この人に何か不首尾があったのか、船主のうけが悪いらしく諸事うまく進行しない。一日も早く漁区に行くことであるが、ぼくは直接に船主との話し合いはできず、総支配人瀬谷氏に従うだけであった。

それでも、五月二十五日よいよ近江丸（船主―飯田信三）と長栄丸（船主―久保九二）の二隻で出漁した。どちらも一〇〇―一三〇屯程度の木造帆船で、もちろん補助エンジンなしである。出帆直前に判明したことは、肝心の瀬谷和一氏が船に乗りこまないことである。全く未経験のぼくを、代理支配人としてオホーツク漁業に向かわせたのである。船員にも経験者は少なく、ただ網と米は積んであった。

結果は不漁。しかも帰航に大時化を喰らい、辛じて反転して樺太の大泊に待避。ぼくはまだ月給を貰っておらず所持金僅かに二十円、帰漁後の歩合金だけが約束の船員一同にも金があるはずはなく、契約支度金は殆ど家族に渡しておるのが普通で、独身者も親元に送金しており、少々の所持金は出航前に函館で遊興に消

能古博物館だより

えている筈である。大泊での全員上陸で、入湯、食事にと、ぼくは無一文になった。

大不漁の真相は、鮭、ますが不漁であったからではない。漁の仕方が悪かったのである。この主因は、カムチャッカ漁場の経験者瀬谷和一氏の欠落である。

ぼくには遺憾ながら実地経験がなく、それに両船の船長も漁業は素人で、今回の就航前は北海道内の石炭輸送に従事、五、九月の石炭不需要を稼ぐつもりであつたらしい。

漁場要員は両船で十七名、うち漁夫は三名だけ、漁場では船員を合わせて、獲物の陸揚げすぐに塩蔵処理を全員が数日間、不眠不休でやる。これもうまくゆかなかつた。

両船とも積載の小舟は一隻で、実は三隻を必要とするのである。漁群の接岸がわかると、漁区沖の海面に網を仕掛けるのに絶対に小舟三隻で作業する必要がある、二統の網を仕掛ければ引き揚げに一統十名を要するが、これも不足であり、すべて迅速が最要件であるのに不馴れのため円滑に運ばなかつた。取れた鮭鱒は、租借漁区の陸地で直ちにエラ、内臓を除き塩を入れる。この作業にも熟練と、かけ声をかける者がなかつた

のである。

普通、鮭群は旬日をおいて二波群が一群づつ河川を遡上する。この間およそ十日、これで漁場全員が一息つき、次を待機、準備できる。

以上がすべて不首尾であつた。それでも鮭四千尾、鱒は七千尾ぐらゐを収獲したが、これは他漁区の成果に五分の一にも及ばない量であるから、話しにならないことになる。

漁区見廻りのロシア官憲は、漁業協約実施後のこともあつて期間中に三回の臨検があつた。これこそぼくの任務である。

違反は全くなく、将来のためにアルコールを出して会話交歓に努めた。彼等は酒は好むところで、二回目から、君は最も若いと言ひ、漁獲量が少いのと同情を示して、オペラ河の鮭のために君は恩人だと冗談を言うようになった。この間、いろんな情報も聞かせてくれた。

さて、函館に帰省すると船主の機嫌は悪く、瀬谷はどうしたのかと云う。これはぼくの方が聞きたいことである。少ない漁獲の塩鮭、鱒であるが約四百円位に売れ、これは備船料にもならないとぼやき、「瀬谷を同道してこい。」の一点張りである。ぼくはウラジオイオ以来の熊皮防寒具な

ども売り払い、宿屋生活も長くつづかないと考へていた。

こうした苦しい日々を送っているときに、ぼくがウラジオで沿海州を廻つた時、現地で入手したオホーツクとイルクック間の駅通の露軍の軍用電話測量図を資料として役立つと考え、義軍編成時に知己を得た福島安正参謀次長に送つていたのに対し、陸軍省と印刷された封筒で福



— 姪浜川柳会 —

会誌78・79・80号より

〈登る〉

ママに見て

欲しいジャングルジムの上

岩登り命の予備のないままに

ゆっくり登ろう

人生八十年だとサ

〈風〉

風待ちの港に残る万葉碑

地図にない

道を曲れば温い風

快よい風は汗した者だけに

湖水

青六

柳子

仙太郎

とき代

光子

島安正署名の文中謝意と共に金百円也の為替が、なんと船主宅に郵送された。何よりの助け舟である。

ぼくは、そのまま船主に渡し、損害の一部を補つてほしいと言つた。これで船主の態度は一変した。「すべて瀬谷の責任で君も騙されたのだ。君が弁償する必要はない。」と、以来旧知のような応対になつた。(以下次号)

〈夕忙〉

猫の手も

借りたい猫がひざに来る

孫そろう多忙な妻の嬉しい日

朝刊を斜めに読んで風と出る

〈能古の自然を歩く会〉

ノックして

主人出そうな檀旧居

倒木も思索の森の持つ風情

ウォーターフロント横目に

飛沫く能古渡船

竹の杖夫の愛情かみしめて

〔誌面の都合により多数割愛いたしましたことをお許しください。〕

野人

新二

虎夫

仙太郎

継生

湖水

たみ子

能古博物館だより

能古自然を歩く会

昨春秋、当館好例『能古自然を歩く会』を行いました。

第一回 平成二年十一月八日(休)

第二回 平成二年十一月十七日(休)

第三回 平成二年十一月二十四日(休)

十二月一日(土)には第四回を予定して

いましたが、気象観測史上初といわれた季節はずれの台風のため中止。参加申し込みの方々には大変ご迷惑をおかけしました。

しかし、第一・二・三回は秋晴れのもと、能古のすがすがしい空気を文字どおり満喫することができました。歩く会スケジュー

十時四十四分 姪浜・能古フェリーに乘船
十一時十五分 本館研修室集合
十一時三十分 本館出発

全コース約6km

檀一雄碑・展望台・白鬚神社・檀一雄旧宅等

十三時三十分 本館到着

昼食(能古の幸)

十四時〇〇分 卓話

十四時三十分 本館見学・喫茶

解散

のべ一〇五名が参加され、全コース約6kmを踏破。中には息をはずませた方もいらっしやいました。皆さんのさわやかな笑顔で帰館されました。また、食後の卓話も好評でした。



玄海島を背景に、能古島展望台で記念撮影。本館ロビーにスナップ写真を展示しています。

卓話

第一回「高取雑器」

(神谷 誠)

第二回「雑器の美」

(神谷 誠)

第三回「英国みたま」(椎葉和子)

今後もバラエティーに富んだ内容を盛り込んでいくつもりです。

「歩く会」を終えて、アンケートをお願いしましたところ、皆様より大変有難い回答をいただきました。今後も改善を重ね、『能古自然を歩く会』を続けていきたい(次回は三月に予定)と思っております。奮ってご参加ください。

読者のコーナー

◎ たくさんのお手紙を頂きましたので、その中から紙面の許す限りご紹介させていただきます。

○ 能古博物館だより毎号楽しく拝読させて頂いております。史実に対しての愛情と思いやりが感ぜられます。若い人達の参加もすばらしいと思います。古きを訪ねて尊さを忘れては空しい人生しか残らないのではと存じます。千葉県 多々羅幸男

がしていましたが、日帰りのコースにいい所で、そんなに疲れもせず楽しい一日を過ごすことができました。帰りの船から館や窯の屋根がよく見えて、また出かけたお花も元気にしております。甘木市 酒井かつ代

【福岡市】甲斐田克治様・菅直登様・高松良英様・宗嶋清義様・野口一雄様・藤木光子様

【太宰府市】中村浩理様
ほかの皆様よりお手紙を頂きました。ありがとうございます。

展示品紹介

○ 第1展示室(十二月二十六日入替)

● 古高取 茶道具銘品

● 高取床飾(置物)ほか

○ 第2展示室(十二月二十七日入替)

● 亀井家資料

● 文人画 帆立杏雨、草場佩川ほか

● 矢立・硯箱など文房具類

● 廻船模型・姪浜廻船資料

○ 第3展示室(十二月二十六日入替)

● 多々羅義雄の絵画

● 油彩 15点

● 水彩・スケッチ類 8点

● 多々羅義雄関連資料

なお、正月のお飾りを本館玄関ロビーに飾って皆さまをお迎えしております。

新しい木製展示ケースを設置し、掛物と床置を展示、これに福寿草が新春の彩りを添えています。

高取置物「羊」

高取八之丞重記作

掛物「日の出に富士図」

朝廷絵師「晝所預従四位下

土佐守藤原光孚」の落款が

あり、天保年間作

福寿草 アートフラワー(鉢植え)

当館友の会々員

具嶋菊乃様作

けいしゅう
閨秀

亀井少栞伝 (七) 庄野寿人

「窈窕稿」少栞詩を語る

本稿は、すでに六回を重ねながら主人公少栞の幼少期を父昭陽や亀井家のことなど前提にこだわり過ぎた感があります。ようやく少栞を本題にできる時期に至ったようですが、ここでいま一度、少栞少女期の書と詩の成長を述べさせていただきます。

少栞、文化三(一八〇六)年九才。三月、秋月藩主による「西都雅集」と称した大書画展が太宰府で催され、これに少栞は「行書一行」を出品した。同展は秋月、福岡両藩士はもとより藩地の在野文人、また江戸、京坂からも出展があり、これに伍して少女九才の作品は評判となったに違いない。少栞に藩主黒田長舒は直々に褒賞を与えた。

こうした機会に恵まれると、彼女の書に格段の励みは当然となる。文化五年三月、父昭陽は城下東郊の須恵村に少栞同伴で招遊を受け、その行路の中で茶店に休んだ。折柄の春草萌える情景に、同行の旧門弟で平戸藩の学士神村玄條が即興詩を

分韻する提案に、少栞も即応したことを父昭陽は日記にとどめている。

翌六年五月、父昭陽に師事し生涯亀井家に敬重を尽くした日田の広瀬淡窓が六年ぶりに訪れた時、少栞贈詩を受けて淡窓は率直な驚嘆を表明して、記録にしている。

さらに翌七年八月、亀井塾が恒例にする門弟全員の唐詩五絶会講に、少栞は最優の評定を得ているが、時に、少栞十三才である。

父昭陽は、男子出生が遅れたこともあって、少栞の学問上達が早いを見て、自分の手元役にし、己れの著述浄書を仕込んだ。これらは、なお少栞の学力と書法を練達させることとなった。また、少栞には天性の才能に恵まれたものがあり、これに父昭陽の磨き加わって、親ゆずりの詩と書を開花させた感がある。

まだこの時期は、絵の作品は全然見られない。文化九年、十五才の少栞に昭陽は家作を増築して「窈窕邸」の室号を

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市)・天谷千香子・桑形シズエ
- 箕原 ヨネ・笠井 徳三・鬼塚 義弘
- 柳ヶ瀬健次郎・三宅 碧子・亀井准輔③
- 片桐寛子③・北原 章子・清田 友彦
- 近江 福雄③・小田 一郎・松蘭 守一
- 永田 蘇水・古野 開也・若重 一郎
- 長谷川陽三・財部 一雄・安川 民敵
- 村上 靖朝・竹中 弘起・廣瀬 忠
- 岡部六弥太・山内重太郎・野田和禮②
- 向井 盛信・小柳陽太郎・野田 元彦
- 西嶋 洋子・柏 久・黒川 邦彦
- 速水忠兵衛・高田 浩二・馬奈木文衛
- 三好 恭嗣・田上 紀子・安松 勇一
- 山田由紀乃・上田 良一・西村忠行②
- 広瀬 猛・松尾 久・桑野 次男
- 大櫛 孝子・片岡洋一②・青柳 繁樹
- 重松 義輝・青木 繁樹・中村 紀彦
- 星野 金子・若重 二郎・吉村 雪江
- 坂田 泰滋・星野万里子・百田 孝
- 椎葉 和郎・和田 一雄・花田 範之
- 藤木 充子・俵 信夫・金江たま子
- 岡本 金蔵・中畑 孝信・木戸 龍一
- 玉置貞正②・森藤 芳枝・西島道子③
- 行成 宜貫・石川 文之・西川 真澄
- 片倉 静江・江口 博美・宮崎 和子
- 横山 智一・花田 菊子・板木 継生
- 今村嘉代子・末松仙太郎・石上 澄子
- 吉原 湖水・宮 徹男⑤・池上 フキ
- 安藤 光保・池田 邦夫・野間 フキ
- 和田 慎治・浦上 健・宮崎 集
- 都筑 久馬・齊藤 拓・柳山美多恵
- 吉村 陽子・柴野美智恵・村上 忠生
- 鹿毛 義勝・小金丸弘子・村上 昭子
- 安部 利行・久芳 幸子・村上 正彦
- 久保 喜蔵・吉田 澄彰・西 正憲
- 鍋山 駿一・那須 博・桃崎 悦子
- 石橋 観一・江島 寿人・鬼木 善夫
- (大野城市)・伊藤 泰輔・田代 直輝
- 大西 節子・(春日市)・後藤 和子
- (筑紫野市)・川浪由紀子・脇山涌一郎
- 大森 節子・横溝 清・原 富子
- 西村 国典・(太宰府市)・有吉林之助
- 竹浜いち子・大谷 桂介・石田 秀利
- 本木 康枝・古賀 謹二・蔵田はつよ
- 松本 久子・吉塚 隆一・吉田案山子
- 坂本 斉子・佐藤かね子・浅野 加代
- 田中ゆき枝・永瀬 純一・宗兼 仁子
- 村上美恵子・中村ひろえ・野田 明子
- 矢野 杏子・安住美代子・長沢 悦子
- 佐々木 謙・松尾マキ子・(筑紫郡)
- 結城 慎也・添田 耕造・西村 久夫
- 荒井 昇・田中 文子・与那嶺利三郎
- 上野 イヨ・坂井 勝己・山口 藤枝
- 大串ハマ子・古川 ミチ・宮嶋 秋子
- 八藤丸和子・渡部 良子・寺島 輝子
- (柏屋郡)・酒井 俊寿・櫛田 正己
- 青木良之助・(宗像市)・神崎憲五郎
- 原田 國雄・(小郡市)・大島 成晃
- 松澤アツ子・(甘木市)・酒井カツヨ
- 佐野 至・泉 栄・三浦 末雄
- 具島 菊乃・井上 清③・宮崎 春夫
- 井手 太・田中トクエ・床島 静
- (小石原)・鬼丸 節次・高柳 八山
- (糸島郡)・由比 章祐・(柳川市)
- 川淵 学・庄野 陽一・(八女郡)
- 松延 茂・(大牟田市)・嶽村 魁
- 古賀 義朗・(直方市)・山本 利行
- (筑穂町)・大久保津智夫・(苅田町)
- 木下 勤・(鞍手郡)・久保田正夫
- (飯塚市)・小山 元治・(久留米市)
- 野田 正明・(浮羽郡)・吉瀬 宗雄
- (北九州市)・平野 巖・片桐 三郎
- 知足久美子・石垣 善治・(佐賀県)
- 中山 重夫・甲木 達也・佐々木信子
- 福水フミ代・山下郁夫・池田裕保

付し、彼女の居室を与えたのであるが、これから解説する少栗詩集の「窃窺稿乙亥」一冊は、この室号を題にしたものである。乙亥は、文化十二（一八一五）年の干支で少栗十八才に当たる。

本書の内容は、少栗詩作の時期を示していないが収録は詩九十四首に及び、中には詩題によっておよその時期を推察できるものもある。

なお、本書は推敲（詩文を改訂して仕上げること）したとされる個所もうかがえるが、美濃半紙十七丁綴じ込みの自筆、清書である。

内容は、十七丁即ち三十四頁で現代のB5版を縦横とも二糶小さくした型で、一頁九行野紙の初行冒頭に表題を書き、二行目をあけて三行目からは余白なく書かれている。

内訳は、七言絶句八十五首、五言絶句は僅かに一首、五言律詩七首、七言律詩一首、計九四首である。

最終の三四頁は、詩題「旅興」七言律一首、題「独酌」で同じく七言律一首を全紙に書いている。続き紙にも記載があると思われるが、この最終頁の二詩には大きく※とする抹消線を筆太く引き、さらに大字を落書きの如く書き散らしている。これも間違いなく少栗書体である。これ

を除く各頁は少栗特有の美しく勢いある書で充滿されている。

さて、本書を少し読んで参考に供してみる。

題「江春晚望」

古寺疎鐘渡水湾 紫烟偏鎖夕陽山
春江如練流光遠 一片蒲帆帶月還

古寺疎鐘、水湾を渡る

紫烟、偏りて夕陽山を鎖す

春江は練の如く光遠流る

一片の蒲帆月を帯びて還る

遠く古寺の鐘の音は人江の水を渡って聞こえ、紫色の煙霧は彼方に寄り夕陽に映える山を鎖すようだ。

春の入江は、練り絹のように遠く輝やきを見せて流るる如くである。

これに一隻の帆船が月の出を背にしながら帰ってくる。

晩春、入江の夕景を眺め、文人画にまとめあげた詩心である。

同題で又とした詩

雲繞山腰夕日紅 梨花如雪舞長風
惜春詩酒何清賞 都在鶯兒百囀中

雲繞り山腰の夕日、紅なり

梨花 雪の如く長風舞う

惜春の詩酒何んぞ清賞せん

都て 鶯兒百囀の中に在り

雲はめぐり、山裾に夕日は映えて

堀田 和子・(大分県)・橋本 敏夫
(熊本県)・浜北 哲郎・(山口県)
大塚 博久・(大阪府)・小山 富夫
大橋孝太郎・(滋賀県)・小堀定泰
(愛知県)・杉浦 五郎・(神奈川県)
中野 晶子・(東京都)・片桐 淳二
山根 貞与・(千葉県)・森 久
(宮城県)・田中 信彦・(北海道)

船越谷嘉一

【協賛会員(個人)】

緒方 益男(佐賀)・伊藤 茂吉(厚木)
立石 武泰(福岡)③・白水 義晴(東京)
出光 芳秀(福岡)③・菅 直登(福岡)
木原 敬吉(飯塚)・大里 豊男(福岡)
梅田 光治(福岡)③・花田加代子(福岡町)
西村 俊隆(東京)・池田謙介(福岡)
今林 昇(福岡)③・高原 敬治(太宰府)
江崎 正直(大牟田)・中村 登(福岡)
小川 恒之(福岡)③・野口 一雄(福岡)
大坪 正治(太宰府)・奥村 宏直(福岡)
荒木 靖邦(福岡)③・村上五一(福岡)
七熊 澄子(太宰府)・多々羅幸雄(千葉)
早船 正夫(福岡)③

【協賛会員(法人)】

南九大みやび・池田謙介(福岡)③
葦 書 房 (有)・久本三多(福岡)③
流通 共 済 (株)・花田積夫(福岡)②
物流システム(株)・平田真輝(福岡)③
橋詰ビジネス(株)・橋詰和元(福岡)③
東洋特殊機工(株)・西尾敏明(福岡)③
福岡流通警備保障(株)・村上五一(福岡)③
タイム社印刷(株)・安部栄一(福岡)③
株 笠 組 忠 夫(福岡)③
博多ちくわ・株魚嘉・松尾嘉助(福岡)③
権藤税理事務所・権藤成文(福岡)③

※新規の御加入(先号以後、一月二十五日まで)は、右の地区ごとに記載いたしておりますので、何卒御芳名を御確認下さい。ありがとうございます。

お知らせ

別棟「現代郷土美術館」建築

昨年十二月に着工しました新館増築が四月に完成の予定です。

現代郷土美術館には、谷口治達先生寄贈の郷土作家五十四氏、六十余点を展示、また、開館時に寄贈を受けた多々羅義雄コーナーを設けます。なお、当館は将来にわたり新進作家の作品を加えるため、その意義を期して、谷口先生を中心に適切な方法をとることにします。

友の会 年間3千円
(館の活動、館誌購読と催事企画に参加) 自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円
〃(法人) 年間3万円
館維持、資料収集、施設整備等の資金援助を受け
納入方法 郵便振替 福岡3160970
財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載、以後会費相当期間を名簿にします。
【お願い】ご送金は振替用紙(送料加入者負担)をご利用下さい。用紙はご連絡次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資料など当館に皆様のご支援をお寄せ下さい。



少柴梅花図
(127.5×26.5cm)

紅を見せる。梨の花はさながら雪の如く、折柄、一陣の風は吹雪を舞わすようである。ゆく春を惜しんでいると、巢立ったばかりの鶯が、しきりに囀り始めたが、ここにこそ春景のすべてがあるとしよう。

まるで酒仙人の心境である。詩は想像の世界に遊ぶ、というが、乙女にできることではないように思うのは、野暮天か。

題「園圃小景」
芙蓉花発水盈湾 日暮玄猿抱子還
樹竹吟風天楽動 坐忘骸骨在人間
芙蓉、花発いて水、湾に盈つ
日暮れて玄猿子を抱いて還る
樹竹、風に吟じて天楽動す
坐るに忘る骸骨の人間に在るを
芙蓉の花は開き、水は人江に満ちている。折しも、日暮れて親猿が子を抱いて還えらんとする。樹や竹は風を通し、さながら歌い、天すべてが楽しく動いているように

ある。こういう境致にあると、人が骸骨で出来ていることも、また俗界にあることすら忘却の彼方にしてしまおうようである。

以上の詩は、人間(人間社会つまり俗界をいう)にありながら幽玄境に遊ぶ心地を詩化したような作品である。

よって、次は極めて叙事的な題を選んでみよう。

題「暮春送家弟騶虞遊雷山」
「暮春、家弟騶虞を送り雷山に遊ぶ」
仙郎何空滿山霞 相送河梁日已斜
九十春風吹欲盡 芳郊桃李自飛花
仙郎、何にか去り滿山霞む
相送り河梁、日己に斜なり
九十、春風吹いて尽きんと欲す
芳郊、桃李、自ら花、飛ばんとす

この詩作時期は、少柴がまだ百道で弟(昭陽長男)の騶虞即ち義一郎を家族とする頃の作詩で、弟義一郎

が糸島郡方面の親戚を訪門するのに
ついて少柴も共に出掛け、行路の雷山に登った時のことを詩にしたと思われる。しかし、その時期を証明する記録がなく、残念である。

また、父昭陽が文化六年八月、烽火台番を命ぜられ、これに赴く時に作詩したとされる「天山烽火起る、旌旗城関を出ず、劍を按じて玉帳を褻し、喟然独り嘖呻す……」の五言律がある。これを当時の少柴十二才の作とするのは、いささか難があるように思われる。よって叙事詩について、その事態と作詩時期を同時に考えるのは無理としなければならぬようである。

最も作詩の時期証明にされるのは、文化六年の少柴十二才の時に、日田の広瀬淡窓が亀井家を訪れた際の、少柴の贈詩である。淡窓は驚くと共に贈詩を感賞、少柴詩に和した返詩を記録しながらも残念ながら少柴詩を欠いている。もし発見できればこれこそ的確に時期を証することができる。

ともあれ、少柴十八才前の詩集である「窈窕稿乙亥」を概見に供した。御批評を賜わりたいと念ずる次第である。(以下次号)

本号執筆者の紹介
谷口治達氏

「郷土現代画家の作品について(下)」
九州造形短期大学教授・美術評論家連盟会員・当館専門委員

古川善久氏

「二川相近について」
元九州歴史資料館副館長・当館専門委員

庄野寿人氏

「真翁銅像ものがたり(四)」
「閨秀亀井少柴伝(出)」
当館亀陽文庫理事長

編集後記

緊迫した社会状況のまま新しい年を迎え、いまだに悪化の道をたどっています。世界の平和を心より願います。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881